

令和7年度

令和7年6月6日(金)発行



長岡第四中学校 学校だよりNO. 3.5

TEL (075)951-2112 FAX (075)951-8430

ホームページ <http://www.kyoto-be.ne.jp/nagaoka4-jhs/cms/> ⇒

E-mail nagaoka4-jhs@kyoto-be.ne.jp



「戦後80年」の今年に その2

校長 高橋 泰三



R7 四中平和セレモニー（沖縄県平和の礎にて）

生徒の皆さんへ。今回は、先日発行した「NO.3」のつづきです。その最後に、「近くの人への『心から思いやりのある声かけ』から始めてみませんか」と書きました。それが「平和」とどのように関係するのか、最後まで読んだ人は???と感じたかもしれませんので、私が皆さんに考えて欲しかったことを伝えるためのものです。

そもそもですが、「平和」とってどういう状態なのでしょう。少し調べてみました。「平和学の父」と言われるノルウェーの社会学者ヨハン・ヴィンセント・ガルトウング氏は次のように言っています。「平和」は大きく

二つに分けられる。一つは「戦争や暴力がない状態」、これを「消極的平和」といい、もう一つは「貧困や差別などがない、協調と調和がある状態」、これを「積極的平和」という、のです。「消極的」という言葉になんら先入観を持たないとして、「戦争や暴力がない」ことが究極の平和なんじゃないかと今まで考えていた皆さん、「平和」には「積極的」なものがある、と世界的に著名な学者さんが言っているのです。彼は「平和」の対局にあるものを「暴力」と捉え、戦争や虐待などの「直接的暴力」（例えば紛争、家庭内暴力など）、貧困や差別など、集団に特定できないような社会構造を原因とする「構造的暴力」（例えば環境問題、飢餓など）、弱い立場にある人の抱える問題を、その人の自己責任だとして暴力を肯定するような「文化的暴力」（例えば他者への不寛容、偏見、無関心など）の3つを挙げています。ずいぶんと難しい話になってきました。（四中の皆さんなら分かってもらえんと思って続けます。）

このように考えた時、「平和」な状態と言っても人によって、または国や社会によって課題意識は違ってきます。つまり、人によって、国、社会によって「平和」も異なってくるということです。私たちの日本にとって、京都府にとって、長岡京市にとって、四中にとって、それぞれの学級にとって、そして自分自身にとって、「平和」とは何なのか、ということを考えて欲しいと思っています。例えば四中について想像してみてください。誰もが安心して学校生活を送ることができる学校、困っている人を置き去りにせずいつもお互いに気をかけながら生活できる学校、周りの人に嫌なことを言われたり言ったりしない学校、自分が思ったことや考えたことを自由に発言したり行動できる授業や学級、上手くても上手くなくても伸び伸びと練習することができる部活動・・・などなど。これって「平和」だからこその状況ではないでしょうか。その状況を生み出せる人間関係を築くことができる学校って「積極的平和を実践する学校」と言えるのではないのでしょうか。その第一歩として私は、「近くの人への『心から思いやりのある声かけ』から始めてみませんか」と皆さんに問いかけました。

平和祈念資料館に千羽鶴を奉納



私たちが望まなくても、広い世の中や未来には、およそ想像もつかないような劣悪な環境や、強いモノが弱いモノを虐（しいた）げるような状態にであってしまかもしれません。その時、私たちは何を考え、どのように行動し、どこを目指していくのか、ということ想像することは意味のないことではないと思います。今年の修学旅行はそんなことも考えさせてくれた、私にとっても大変有意義なものでした。明確に生徒が目指して欲しい姿をいつも語りながら「考える修学旅行」のプログラムを考えていただいた学年主任の辻野先生はじめすべての学年の先生方、企画から運営まで明るく実践した生徒会本部役員はじめすべての生徒の皆さんに感謝です！



サザンビーチホテル美々ビーチに